

 書評

吉野相英 監訳

臨床てんかん next step

山内俊雄

精神科医のてんかん離れが言われて久しい。確かに、精神科医に代わって小児科医や神経内科医、脳神経外科医がてんかん診療に関わるようになり、精神科医の関与が減っている。しかし、ある調査によれば、精神症状を併発している場合や知的障害や行動面の障害のあるてんかん患者の診療には困難を感じると答える小児神経科医や神経内科医が多いという(渡辺雅子ら、てんかん研究, 2013)。このことは、精神科医の関与なくして適切なてんかん診療はできないことを意味している。

「臨床てんかん next step」は、Trimble と Schmitz によって編集された The Neuropsychiatry of Epilepsy, Second Edition の邦訳である。Michael Trimble はロンドンで、Bettina Schmitz はベルリンで長くてんかんの精神症状に関わってきた研究者である。北米大陸と異なり、ヨーロッパのてんかん学は精神医学と神経学が密接な関係を持って発展してきたこともあって、日本のてんかん学と共通する考え方も少なくない。

本書にはいくつかの視点がある。その一つが、「疾患からみたてんかん・てんかん発作」である。知的障害、自閉症スペクトラム障害、認知症といった疾患と、てんかん・てんかん発作についての記述があり、たとえば知的障害で生じるてんかん発作の章では、その背景にある遺伝子型などから治療や予後を考え、最近注目を集めている高齢発症のてんかん発作や認知症に伴う発作の出現や治療なども、最新の学問的知見を踏まえて記述されている。

もう一つの視点は、「てんかんからみた精神症状」である。「てんかん発作に伴う認知行動障害」、「発作周辺期精神症状」、「発作後精神病」、「発作間欠期不快感障害」など、いずれも一般臨床で遭遇することが多く、時にはてんかんととの関係をどう考えるべきか迷うような症例に対しても示唆を与えてくれる。

抗てんかん薬という視点からは、「抗てんかん薬の向精神薬作用」、「抗てんかん薬と自殺」、「抗てんかん薬と認知機能障害」など、抗てんかん薬にまつわる問題を精神医学的視点からとらえている。また、「感情失認と心の理論」、「てんかんと意識」、「心因性発作」、「てんかん外科治療と精神症状」の章のようにてんかんを通して精神医学を考える記述を読むと、わが国の精神科医たちがてんかんとのかかわりを持ちながら、常に精神医学にてんかんで得られた知見を取り込んできた歴史を思い起こすとともに、てんかんによって精神医学の世界がいかに豊かなものとなってきたかをあらためて認識するのである。

このように、本書は単に「てんかんの精神医学的側面」についての記述にとどまらず、今後とも精神医学がてんかんから多くのことを学び、そしてまた、てんかんの包括的医療に携わる責任が精神科医にあることをあらためて認識する、そういう本でもある。

(埼玉医科大学名誉学長)

●B5 248頁 2013 定価: 本体: 5,800円+税
新興医学出版社